

佳作

普通とは何か

新潟県佐渡市立金井中学校

3年 宇治 アンナ

私が小学生の時だった。理科の実験中。試験管に液体を入れ、混ぜるために試験管を振っていると

「パリン」

試験管が割れた。先生は少し立腹した様子で言った。

「普通縦に振らないよね？ アホだな。普通横に振るんだよ。」

また出た。「普通」という私が嫌いな言葉。「普通」とは何か。辞書で調べた。

「特に変わっていないこと。ごくありふれたもの。当たり前であること。平凡。」

私は不思議に思った。特に変わっていないこと？ 当たり前であること？ 先生にとっての普通をなぜ私に突き付けられなければならないのか。

前にもこんなことがあった。父と話していた時のことだ。

「普通に就職して、普通に結婚して人並みに幸せになればいい。」

「そうだね。」

私はそれしか返答することができなかった。その後は沈黙が続いた。私は「普通」という意味の深さ、そして難しさを突き付けられたような気がした。「普通に就職する」「普通に結婚する」私たちの両親が普通、当たり前にしてきたこと。確かに両親にとってそれらは当たり前のことだろう。しかし、それはとても難しいことだ。就職をして結婚して子どもをつくって学校に行かせる。たまには家族で旅行に行って、問題を起こさず笑顔があふれる家庭にする。人並みに幸せになればいい。私は父の「普通」という名の人生の宿題を出されたようで、ズシッと重圧がのしかかった。そこから私は「普通」という言葉に敏感になった。

ある日先生が言った。

「普通に勉強すれば取れるテストでした。」定期テストの解答の説明の中、ポロっと口にした。ただ。先生にとっての普通を突き付けられた。普通に勉強するとは何だろうか。先生の言う「普通に勉強する」というのは、ただひたすらワークを何回もして、暗記すればいいのか。それとも教科書の端から端まで記憶して、さらに発展問題まで解けるようにしておく。それが普通なのか。違う。そうではないだろう。先生の「普通」は、誰もが共有している基準ではない。はたから見ると努力していないように見える少女。でも、彼女なりの頑張りがある。順位は下がった子も、点数を見れば100点上がっていた子だっている。

その子たちにとってはすごく大きな成長なのだ。先生にとっての「普通」は私にとって「普通じゃない」のだ。

「普通」とはとても便利な言葉だ。近頃「普通においしい」とか「普通に好き」といった「普通」を「程度を表す言葉」として使うのが流行っている。私もよく使う言葉だ。でも「あなたって普通に面白いよね。」と言われてもうれしくない。なぜか。訳してみよう。「あなたって面白さが平凡だよね。」とされているようなものだからだ。それなら、「あなた面白いね。」と言われた方がうれしい。

私たちが普段使っている「普通」。この言葉には、私たちが考える以上に強い力がこもっている。その語を言われることによって私は「他人の基準を当たり前のこととして押しつけられる居心地の悪さ」や「それを普通という言葉ですませてしまうことへの理解しがたさ」を感じてしまう。

最近の若者、大人たちは「普通」という言葉を通常の使い方と変えて使っている。「普通」とは人を否定するためにつくられた言葉ではないし、凡人扱いをするための言葉でもない。人は他人のために生きているのではない。自分の人生を楽しくするために過ごしているのだ。「普通この練習メニューはしない。」とか「普通謝るでしょ。」とか他人の普通を突き付けられるのはもううんざりだ。私は私のために生きる。結婚しようが、大学に行こうが行くまいが、私の人生なのだ。私は生涯「あの人は普通じゃない」そう言われて生きていきたい。